沼田が起点に　牧水と迎えた若者との結びつき

歌碑　若山牧水　－栗生峠、利根町老神、舒林寺－

左）栗生峠の一角に建つ吉次との別れを書き記した歌。番傘を原形のまま石に刻んではめ込み建てられたといわれている　右）10月25日、老神への出発に際し、宿に集まった若者たちと記念撮影をする牧水（前列右から2番目）

旅とともにお酒や自然をこよなく愛した歌人、若山牧水は、全国を旅し、詩情豊かな多くの歌を残しています。牧水は1918（大正7）年と1922（大正11）年に利根沼田を訪問し、『みなかみ紀行』を残しています。

1922年10月21日、牧水は渋川から「利根軌道」の電車に乗り、終点の鍛冶町で降りました。「郵便物を受け取るために郵便局に立ち寄ると、局員の戸部素行さんが宿直でおり、窓口に出ました」と、元高校教諭の田村滋さん。

素行は牧水に気づき宿の名を聞くと、文学に親しむ友人たちに知らせました。その晩、山田屋書店店主の金子刀水ら6人が、牧水が宿泊する中町の鳴滝旅館を訪ねました。翌日、牧水は法師温泉へ。23日は湯宿温泉に泊まり、毎晩突然の若者の訪問を受けました。「沼田に来て蜘蛛の巣にかかったようだ。知らない間にいろいろな事が行われている」と妻宛ての手紙で書いていることから、田村さんは「当時の利根沼田は文学が盛んで、山田屋書店が文化の一つの中心地になっていました。ここで牧水の来訪を知った若者たちが毎晩牧水に会いに行き、その熱意に驚いたことでしょう」と想像します。

翌25日は、法師温泉で知り合った生方吉次とともに、老神へ向かいました。道中、片品渓谷の落葉などに心を奪われ、老神温泉で疲れを癒やしました。

26日は朝から雨。吉次が買ってきた番傘に2首書き記し、2人は別れ、牧水は金精峠を越えて上州路を後にしました。

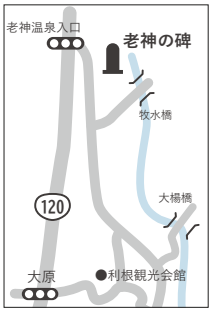
かみつけの
とねの郡の老神の
時雨ふる朝をわかれゆくなり

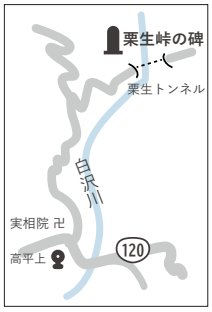
相別れわれは東に君は西に
わかれてのちも
飲まむとぞおもふ

牧水はみなかみへのあこがれがありました。「牧水の故郷、宮崎県日向市東郷町坪谷は川の上流（みなかみ）。上州のみなかみの地に住む短歌の社友に会えればとの思いで来てみると、毎晩若者たちが現れ、その熱意が『みなかみ紀行』を書かせたのでしょう」と話します。

牧水を追いかけた若者たちは、戦後、沼田の政治や文化のリーダーとして足跡を残しています。その一人の生方誠は沼田町長となり、牧水顕彰に努力しました。

田村滋さん
－鍛冶町－





右から）利根村発足30周年にあたり、牧水ゆかりの地に郷土の文化発展を願い老神に建碑。大楊への橋は「牧水橋」と呼ばれている／牧水の歌を詠んだ番傘の形をした銅製の歌碑（舒林寺所蔵）／鍛冶町の利根軌道の終点駅。渋川から約4時間かかったという

令和5年1月号でも、若山牧水を特集しています。二次元コードからご覧ください